

軍人事異動が映し出す政軍関係の曲がり角

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

教授 玉田 芳史

はじめに

2019年10月1日付けの軍隊将官定期人事異動名簿が、9月5日に国王の裁可を受け、9月7日に官報に布告された。

軍隊が政治への関与を減らしていた1992年から06年にかけての時期には、軍隊の人事異動への関心は低下していた。しかし、06年以後、軍隊が政治への関与や支配を強めたため、人事異動が再び注目を集めるようになってきている。注目を浴びるのは、人事異動が、軍隊と政府の関係の指標になるのが大きな理由であろう。

定期人事異動は毎年10月に大規模なものが実施され、4月にも中規模なものが実施される。19年10月の異動は衝撃的な内容ではないものの、軍隊と政治の関係が大きな曲がり角にさしかかっていることを反映していたように思われる。ここでは、軍隊の人事異動の読み方を説明しつつ、何が変わりつつあるのかを示したい。

1 人事異動のルールとパターン

1.1 陸軍の優位

軍隊は陸軍、海軍、空軍の3軍で構成される。3軍の上に国軍最高司令部があり、国防事務次官を介して国防大臣の指揮下に置かれる。制服組の実際の力関係は、総司令官>最高司令官>事務次官となっており、3軍の中では政治力を反映して陸軍が突出している。軍隊の最高実力者は国軍最高司令官や国軍参謀長（≒統合幕僚長）ではなく、陸軍総司令官である。人事異動にあたって、陸軍将校は国軍最高司令部や次官事務所への転出を左遷とみなして好まない。一度転出すると、陸軍へ戻れる可能性は非常に低い。

陸軍の頂点には「5虎」と呼ばれる幹部がいる。総司令官、副総司令官、参謀長、総司令官補佐2名の合計5名である。総司令官は、ごく稀な例外を除いて、総司令官以外の4虎から選抜される。総司令官になるには、まず5虎の仲間入りが必要不可欠である。

地位が高くなるほどポストの数が減るため、出世競争は熾烈である。3軍には士官学校（大学相当）が1つずつしかなく、士官学校進学前には3軍と警察に共通の予科学校（高等学校に相当）を経るため、学閥は出世競争において意味をなさない。意味があるとすれば、一般大学卒業生や外国の士官学校卒業生を、出世レースから落伍させる

場合である。軍が政治に関わるようになった1932年以後には、外国の士官学校卒業生が総司令官に就任した例はない。

出世競争を勝ち抜くには、派閥形成が有利である。派閥は、士官学校の学年（期）、所属部署、血縁関係などを核として形成される。結束して出世頭の昇進を助け、成功の暁には仲間を引き上げてもらうという仕組みである。久しく同期生がもっとも重要であったものの、同期生を決裂させて決行された2006年クーデタ以後は、所属部隊が前面に出るようになった。同期生が卓越していた時期には、武（実戦部隊司令官）ばかりではなく、文（頭脳明晰な参謀）に長けた将校が総司令官に就任することもあった。しかし、部隊偏重になると、もっぱら部隊指揮官が総司令官に就任するようになった。

部隊指揮官は、中隊長（中佐）、大隊長（大佐）、連隊長、師団長（少将）、軍団長（中将）、管区司令官と順番に階段を上り、その次に5虎になる。60歳という定年が厳守されるため、退職年齢を視野に入れて、50歳代の終わりには5虎になっておかないと、総司令官就任は絶望となる。

1.2 人事異動の自立性

将官の人事権は総司令官にある。国防大臣の同意、国王の裁可を得て、官報で発表される。かつては、総司令官作成の名簿に国防大臣や首相が手を加える余地があったため、阻止策として名簿作成段階で大臣や首相に一定の譲歩をすることがあった。

2006年クーデタで成立したスラユット政権は任期切れ直前の08年2月に、人事異動の規則を改正した。それによって、軍隊は裁判所判事と似通った人事の独立性を獲得した。これは06年クーデタで軍隊の主導権を握った派閥が、07年12月総選挙で勝利して政権を握ることになっていたタックシン派から人事異動で報復や粛清を受けることを防ぐための工作であった。

その現行ルールでは、陸海空の3軍の総司令官、国軍最高司令官、国防次官の制服組トップ5名がそれぞれに自部署の人事異動名簿を作成し、会議に持ち寄る。そこには国防大臣（任命されていれば、副大臣も）が同席し、合議する。異動名簿案に異議が唱えられた場合には、多数決になる。だが、制服組は互いに尊重し合うため、国防大臣の意向で名簿が変更されることはない。国会で選出された首相が任命したという意味で国民を代表する立場にある国防大臣は、実質的には人事権を持たないということになる。人事面における文民統制の欠落である。それが人事異動の独立性ないし自立性の帰結である。

このルールのゆえに、タックシン派は2007年や11年の総選挙で勝って政権を握っても、空軍総司令官を経験した実力者を08年に国防大臣に任命しても、11年に首相が国防大臣を兼任しても、06年に陸軍の人事権を掌中にした派閥を崩すことができなかった。

ただし、この独立性は、国民代表（国会ならびに内閣）からの自立を意味するにとどまり、それ以外の勢力からの独立を意味するわけではない。人事が独立し、判決への批判を法廷侮辱罪で抑制する裁判所が、必ずしも正義や法理に基づいた判決を下すわけではなく、政治的偏向ぶりを繰り返し批判されていることを想起されたい。

1.3 出世コース

軍隊の中心は陸軍であり、陸軍のトップは陸軍総司令官である。陸軍総司令官に至る道筋、つまりキャリアパスはどうなっているのか。

タイの軍隊は将官がインフレ状態にある。2019年10月に異動する将官（少将・中将・大将）の総数は871名にもなった。芋の子を洗うようにひしめき合う将官の中で重要なのは一部だけである。実質的な職務内容が乏しい有識者や顧問といった役職が非常に多い。実権を伴うのはいろいろな部署・部隊の長である。タイでは部署トップへの権限集中が著しいので、副師団長や次長は閑職ともいえる。たとえば、管区の副司令官と軍団長はほぼ同格ながら、鶏口と牛後には天と地の開きがある。

陸軍総司令官は、原則として5虎から選ばれる。過去20年間の11名の陸軍総司令官のうちこの原則から外れるのは、1998年に就任したスラユットのみである。スラユットは5虎就任を目前にして閑職へ追いやられていたものの、枢密院議長プレームの強い後押しがあって総司令官に就任した。

表1 陸軍総司令官の前歴と出身部隊（1998年以後）

就任年	名前	総司令官就任前の主な経歴	出身部隊
1998	スラユット	陸軍特別有識者←第2管区司令官←特殊戦争部隊司令官←第1特殊戦争師団長	特殊戦争師団
2002	ソムタット	陸軍参謀長←第1管区司令官←第1師団長←第1歩兵連隊長	第1師団
2003	チャイヤシット	陸軍総司令官補佐←国軍最高司令部開発部隊副司令官←第42州軍司令官←第4開発連隊長	工兵部隊
2004	プラウィット	陸軍総司令官補佐←第1管区司令官←第2歩兵師団長←第12歩兵連隊長	第2歩兵師団
2005	ソンティ	陸軍総司令官補佐←特殊戦争部隊司令官←第1特殊戦争師団長	特殊戦争師団
2007	アヌポン	陸軍総司令官補佐←第1管区司令官←第1師団長←第2歩兵師団長←第21歩兵連隊長	第2歩兵師団
2010	プラユット	陸軍副総司令官←参謀長←第1管区司令官←第2歩兵師団長←第21歩兵連隊長	第2歩兵師団

2014	ウドムデート	陸軍副総司令官←参謀長←第1管区司令官←第9歩兵師団長←第21歩兵連隊長	第2歩兵師団
2015	ティーラチャイ	陸軍総司令官補佐←第1管区司令官←副参謀長←参謀長補佐←第1軍団長←第2歩兵連隊長	第2歩兵師団
2016	チャルムチャイ	陸軍総司令官補佐←特殊戦争部隊司令官←第1特殊戦争師団長	特殊戦争師団
2018	アピラット	陸軍総司令官補佐←第1管区司令官←第1師団長←第11歩兵連隊長	第1師団

出所：筆者作成

5虎に仲間入りする前のポストを調べてみると、2003年就任のチャイヤシットを除いて、いずれも管区司令官を務めていた。第1管区司令官が7名、管区司令官と同格の特殊戦争部隊司令官が3名である。この10名はいずれも実戦部隊の司令官を経て、管区司令官になっていた。工兵部隊出身のチャイヤシットを除く10名の出身部隊は、第2歩兵師団5名、特殊戦争部隊3名、第1師団2名となっていた。陸軍総司令官になろうという野心があれば、第2歩兵師団か特殊戦争部隊へ配属されるのが望ましいのであろうか（表1参照）。

2 第1師団 vs. 第2歩兵師団

2.1 「神組」と「東部の虎」

伝統的には第1師団が総司令官を輩出してきたものの、2004年以後第2歩兵師団が台頭して、両師団が激しくつばぜり合いを続けていると説明されることが多い。第1師団は首都に駐屯する近衛師団であり、「歩兵」の語句がなく、第1、11、31の歩兵連隊、第1砲兵連隊から構成される。元来は師団司令部に駐屯する第1歩兵連隊が主力部隊ながら、現在では首都北部の第11歩兵連隊が最精鋭部隊となっている。第1師団は、クーデタの決行や阻止に不可欠であり、国家や王室の儀礼でも重要な役割を果たす。

第2歩兵師団は東部プラーチーンブリー県に駐屯する（シリキット王妃警護の）師団であり、第2、12、21の歩兵連隊、第2砲兵連隊から構成される。同師団は70年代後半からのカンボジア内戦以後、軍事的な重要性を高めた。師団司令部に駐屯する第2歩兵連隊に代わって、チョンブリーに駐屯する王妃警護部隊の第21歩兵連隊が中枢の部隊となっている。

「東部の虎 burapha phayak」と呼ばれる第2歩兵師団出身者が台頭すると、第1師団出身者は「神組 wong thewan」と呼ばれることが多くなった。いずれの師団でも、政治権力の獲得につながるポスト争奪戦に参加するのは歩兵である。

第1師団は、政治や経済の中心となる首都に駐屯し、軍内政治の主役として権力に

近く、近衛師団として名誉を伴うといった理由から、将校憧れの部隊である。その「神組」に配属されるために重要なのは、1) 陸軍士官学校での成績が著しく優秀である、2) 父親が軍隊の顕職についていた、という2点のいずれかである。

第2の点についていえば、父親が陸軍の5虎やそれに匹敵する地位にあったことが大切である。それは、ここ20年間の陸軍総司令官11名を調べると一目瞭然となる。彼ら全員が父親は陸軍将校であった。第2歩兵師団出身の総司令官たちの父親はプラウィットが少将、アヌポンとプラユットが大佐、ウドムデートが大將、ティーラチャイが少将である。さらに、チャイヤシットは大佐、スラユットは中佐、ソンティは大佐、チャルムチャイは中佐である¹。他方、神組の総司令官2名は、父親が群を抜いたエリートであった。ソムタットは、1972年にヘリコプターの墜落で死亡した第1管区司令官クリアンクライの息子であり、60年代の陸軍総司令官プラパートの娘婿でもある。クリアンクライは第1歩兵連隊長、第1師団長、第1管区司令官というエリート・コースを歩んでおり、事故死が殉職と見なされて、中將から元帥に特進した。後に元帥が廃止されたので、現代タイ最後の元帥である²。もうひとりのアピラットは、1991年クーデタを主導した国軍最高司令官ストーンの息子である。付言すると、アーティット、イッサラポン、チェーターといった総司令官の息子も第1師団に配属されている³。

2.2 「二世」総司令官？

軍隊による政治介入の長いタイにあって、同じ一族から2世代、3世代にわたって軍将校を輩出した例は枚挙のいとまがない。父親が軍首脳の場合には、その息子はエリート・コースに位置する部隊に配属されることが多い。陸軍でいえば、第1師団の部隊である。この結果、要職へ昇進する可能性が高い。それにもかかわらず、親子で総司令官を務めた前例はない。たとえば、アピラット陸軍総司令官の父親ストーンは陸軍では総司令官補佐が最高位であり、その後国軍最高司令部へ転出した。

2019年の定期人事異動は、親子二代にわたる総司令官が誕生する可能性を高めた。第1師団長から第1管区副司令官へ異動したソンウィットである。ソンウィットは24年の定年までに第1管区司令官を経て、5虎に仲間入りし、総司令官に就任する可能性がある。彼は92年に陸軍総司令官に就任したイッサラポンの息子である。ソンウィットもイッサラポンもともに第1師団の第11歩兵連隊の出身である。それはアピラッ

¹ スラユットの父親は、下院議員を経てタイ共産党に身を投じたという経歴の持ち主である。母親は、1933年10月の反乱で反政府側に加担し死亡したプレーヤー・シーシッティソンクラムの娘である。

² 墜落の原因は、タイ共産党の攻撃とされたものの、実際には違法な狩猟の獲物の過積載にあった。この事故は73年10月の軍事政権崩壊の遠因になった。

³ イッサラポンは、叔父が第11歩兵連隊長、自身が第11歩兵連隊長から第1師団長、さらに陸軍総司令官となり、息子が第11歩兵連隊長から第1師団長になった。

トの出身部隊でもある。

ソンウィットは軍予科学校 24 期生ながら、タイの陸士 (35 期生に相当) ではなく、アメリカのバージニア軍事大学を卒業した。1932 年以後のタイの歴史では、国内の士官学校を卒業せずに、総司令官に就任した前例はない。ソンウィットが総司令官に就任すれば、この点でも新たな歴史を開くことになる。

2.3 都市伝説

陸軍内部では神組と東部の虎が激しい権力闘争を展開していると受け止められがちである。確かに、陸軍首脳に第 2 歩兵師団出身者は数が多い。だが、同師団出身者で陸軍総司令官になったのは、2004 年のプラウィットが最初である。まったくの新興勢力である。第 2 歩兵師団台頭の立役者といえるのは、06 年クーデタを主導したアヌポンである。アヌポンは第 2 歩兵師団生え抜きながら、タックシン首相と予科学校の同期生 (陸士 21 期生) であったことに助けられて第 1 師団長、さらに第 1 管区司令官に抜擢された。しかし、アヌポンは、特殊戦争部隊出身のソンティを名目上の指導者として、実質的な部隊を動員してタックシン政権を打倒した。

アヌポンは 07 年に総司令官に就任し、以後第 2 歩兵師団の後輩を次々と陸軍の要職に抜擢した。第 2 歩兵師団の連隊長からは、第 2 歩兵師団長に加えて、第 9 歩兵師団長に就任するものが登場するようになる。これは、第 2 歩兵師団から第 1 管区司令官へのルートが複線化されたことを意味する。1990 年代までは第 1 師団出身者が他の歩兵師団の師団長に任命される事例が少なくなかったので、人事異動のパターンに大きな変化が生じたことを意味する。

他方、特殊戦争部隊 (空挺部隊) 出身者で最初に総司令官になったのは、1992 年のウィモンである。彼は 82 年に第 1 特殊戦争師団長に就任した後、85 年に第 1 師団長に転じ、86 年には特殊戦争部隊司令官になり、89 年には第 2 管区司令官になった。彼は特殊戦争部隊の生え抜きで、当時の陸軍主流派 (陸士 5 期生) の一角であった。彼は 92 年 5 月流血事件にともなって首脳が更迭されたとき、左遷先の国軍最高司令部から陸軍へ呼び戻されて総司令官になった。主流派の中樞が失脚したため、主流派で無傷のウィモンが総司令官になったというわけである。

特殊戦争部隊出身者で 2 人目は 1998 年のスラユットである。スラユットは 9 世王のもとで久しく枢密院議長を務めたプレームの側近であり、退役後は枢密顧問官になった。05 年のソンティや 16 年のチャルムチャイの陸軍総司令官抜擢は、スラユットとその庇護者たるプレームに負うところが大きい。特殊戦争部隊出身者の陸軍総司令官就任は、そうした「外部」からの引きがないと容易ではない。

第 1 師団出身者はどうであろうか。東部の虎の台頭によって陰りが生じてきたというのは事実であろうか。総司令官を輩出することで陸軍の主導権を握ってきたという

のは誇張である。1950年代から70年代にかけてのサリット、タノーム、プラパートは別格であって、その前のピブーンやパホンは砲兵部隊出身であり、70年代末のプレームは騎兵部隊出身である。70年代のブンチャイ、80年代のプラユット（・チャールマニー）やチャワリット、90年代のスチンダーやプラモンは参謀畑である。第1師団生え抜きの総司令官は40年前の1979年まで遡っても、82年のアーティット、92年のイッサラボン、96年のチェーター、02年のソムタット、18年のアピラットと、20名中5名にとどまっている。

こうしたことを踏まえるならば、第2歩兵師団が台頭するまでは、第1師団が陸軍を支配していたというのは神話といえよう。それにもかかわらず、第1師団が陸軍を支配してきたと広く信じられているのは、「神組」が陸軍中枢部とりわけ5虎にいつも多く顔を連ね、マス・メディアへの露出が多かったからではなかろうか。

3 2019年10月1日付け定期異動の概要

3.1 概要

2019年10月の人事異動では、陸軍では部隊司令官に大幅な入れ替えがあった。大規模な異動は総司令官の交代時に実施されることが多い。今回は、総司令官に異動がなかったため、やや変則的な異動といえる。

5虎のうち総司令官、副総司令官、参謀長には変化がなく、総司令官補佐が2名とも交代した。第1管区司令官ナロンパンと特殊戦争部隊司令官スナイが総司令官補佐になった。

第1管区司令官には2017年から2年間第1軍団長の職にあったタムマヌーンが昇任した。特殊戦争部隊司令官の後任はプーミパットである。防空部隊司令官も16年から2年間高射砲師団長を務めたことのあるパンロップが就任した。

師団長の交代が多く、第1管区では第1師団長にソンボン、第2歩兵師団長にタラーボン、第2騎兵師団長にカンタポット、第11歩兵師団長にパナー、第2管区では第3歩兵師団長にサワラート、第3騎兵師団長にプリーチャー、第3管区では第4歩兵師団長にウクリット、第1騎兵師団長にタナットボン、第4管区の第5歩兵師団長にサーンティが就任することになった。

3.2 第1管区司令官

上述の通り、ここ20年間の総司令官11名のうち7名は第1管区司令官、3名は特殊戦争部隊司令官の経験者である。特殊戦争部隊司令官は特殊戦争部隊の生え抜きであり、同部隊には師団が1つしかないため、その師団長を経験している⁴。主たる登竜

⁴ 1980年代にはロップブリーの第1特殊戦争師団とは別に、チェンマイに第2特殊戦争師団が設置

門といえる第1管区司令官のほうは、同管区の第1、2、9の3つの師団から出てくる可能性がある。ここ20年間の第1管区司令官16名の内訳は、第1師団7名、第2歩兵師団9名となっている。両師団は互角と思われるかもしれない。しかし実は、第2歩兵師団出身の最初の第1管区司令官は1997年就任のニボンが最初であり、02年のプラウィットが2人目である。同師団は以後急増することになった。

この急増の主因は2006年クーデタである。立役者はアヌボンであり、彼の後は3人立て続けに第2歩兵師団出身者が第1管区司令官となり、その後は両師団の出身者が交互に就任するようになって、今日に至っている（表2参照）。ただし、総司令官については13年に第1管区司令官になり、15年に総司令官に就任したティーラチャイが最後となった。

表2 第1管区司令官（2000年以後）

名前	就任年	出身師団	備考（到達点）
ソムタット	2000	1	総司令官
ポーンチャイ	2001	1	
プラウィット	2002	2	総司令官
パイサーン	2003	1	
アヌボン	2005	2	総司令官
プラユット	2006	2	総司令官
カニット	2008	2	
ウドムデート	2010	2	
パイブーン	2012	1	枢密顧問官
ティーラチャイ	2013	2	総司令官、枢密顧問官
カムパナート	2014	1	枢密顧問官
テープボン	2015	2	
アピラット	2016	1	総司令官
クーキアト	2017	2	
ナロンパン	2018	1	
タムマヌーン	2019	2	

出所：筆者作成。

されたものの、後者は廃止された。

3.3 東部の虎の退潮

神組と東部の虎の対抗という観点からすると、第 1 管区司令官から総司令官補佐に昇任したナロンパンは神組、第 1 管区司令官に昇進したタムマヌーンは東部の虎である。彼らはいずれも陸士 33 期生であり、定年退職は前者が 2023 年、後者が 22 年なので、総司令官争奪レースでは前者が大きくリードした。

タムマヌーンは第 12 歩兵連隊長から第 9 歩兵師団長を経て第 1 管区司令官に就任した。彼以外の東部の虎について見ておくと、クーキアトはアピラットと同じ陸士 31 期生であり、出世競争のライバルであった。クーキアトは、第 2 歩兵連隊長を経て、13 年に第 2 歩兵師団長に就任した。アピラットが第 1 師団長になったのは半年後なので、その時点ではクーキアトが先行していた。しかし、第 1 軍団長就任はアピラットが 15 年であり、クーキアトは 1 年後の 16 年であった。ここで両者は逆転し、第 1 管区司令官就任はアピラットが 16 年、クーキアトは 17 年、そして総司令官補佐就任はアピラットが 18 年、クーキアトは 19 年であった。出世競争に敗れたクーキアトは 19 年 10 月には国防副事務次官に転出して、陸軍総司令官補佐のポストを空けた。次に、第 21 歩兵連隊長と第 2 歩兵師団長を経験したサンティポン（陸士 33 期生）は第 1 管区副司令官から陸軍文民活動部長に、その後任の第 21 歩兵連隊長ならびに第 2 歩兵師団長であったチャルーンチャイ（陸士 34 期生）が第 1 管区副司令官から第 1 軍団長に昇任した。ピヤポン（陸士 34 期生）は第 2 歩兵師団長から陸軍士官学校副司令官へ昇進した。

サンティポンは、同期生のナロンパンが総司令官補佐、タムマヌーンが第 1 管区司令官に昇進したのと比べると見劣りがする。これはサンティポンが「赤首(kho daeng)」ではないからとされている。他方、同じく東部の虎のチャルーンチャイが、第 1 管区副司令官から第 1 軍団長に昇進したのは、彼が「赤首」だからとされる⁵。

もう 1 点着目すべきは、第 2 歩兵師団内部における変化であろう。第 2 歩兵師団を台頭させたのはシリキット王妃から寵愛を受けた第 21 歩兵連隊である。アヌボン以後、第 21 歩兵連隊長は第 2 歩兵師団長の最有力候補となっていた。しかし、テープボン、サンティポン、チャルーンチャイ、ウォーラユット、アマリットと続いた同連隊長は、チャルーンチャイまでは第 2 歩兵師団長になったものの、ウォーラユットは第 11 歩兵師団長にとどまった。アマリットは第 1 師団の副師団長になったときに第 1 師団長になるのではないかという観測もあったものの⁶、同師団生え抜きの同期生ソンポン

⁵ “Wikhro ralai ‘wong thewan – thahan sua – buraphaphak’ kognthap yuk ‘big daeng’ ‘kho daeng’ saphrang”, *Matichon Sutsapda*, Sep 13-19, 2019 (https://www.matichonweekly.com/in-depth/article_228352)

⁶ “Botwikhro: mua thahan sua mai yom long cak lang sua ‘big tu’ mai who kho pa to cap ta phaen lap kanmuang kap botbat ‘big daeng’ Change lae line ‘big b-set. op’”, *Matichon Sutsapda*, Sep 28 – Oct 4, 2018 (https://www.matichonweekly.com/special-report/article_93028)

が師団長になったため、可能性が遠のいた。チャルーンチャイ以後の第2歩兵師団長は、第2歩兵連隊長のスックサン、第12歩兵連隊長のピヤボンとタラーポンである。第21歩兵連隊出身者が一時の勢いを失ったことが、第2歩兵師団の低調を招く一因ではないかと思われる。

ところで、「赤首」とは何か？それを次節で眺めてみよう。

4 904部隊（国王警護近衛兵特務部隊）

4.1 「新しい軍」

ある人物が2019年9月22日にフェイスブックに書いたことが、オンライン・ジャーナルに転載された。「今日、タイでは軍隊は4軍になった。陸軍、海軍、空軍、そして陸軍から分離した新軍である。この新軍の規模は小さい。しかし、その権威は突出している。新軍は、首都に駐屯しており、陸軍とは別の司令官が置かれているものの、予算が陸軍に紛れ込まされている。」「新軍では、兵士は特別に選抜される。特別に厳しい訓練を受け、群衆対応という特殊な専門能力を身につける。」「この新軍の兵員数は5,000人である。これは過去になかった規模である。ごく最近になって7,000人へ増えた。20,000人へと増やす計画がある。何のためだろうか。」「陸軍が〔アメリカから最近〕調達した装輪装甲車ストライカーは、70両すべてではないものの、一部が新軍に配備される予定である。」「軍隊でこのように大規模な改革が実施されつつあるにもかかわらず、なぜかテレビのニュースではまったく報道されない。」

ここで「新軍」と呼ばれているものが、いわゆる「904特務部隊⁷⁾（904部隊）なのか、それとも「国王警護親衛兵⁹⁾（親衛隊）なのか、筆者には分からない。10世王治世になって、軍隊の再編が進んでいるものの、その実態はまだ把握が難しいからである。

10世王治世当初は、首都に駐屯する部隊が首都から転出させられるとの噂で持ちきりであった。その噂では、これまでクーデタに関与してきた首都の部隊は、君主制にとって危険なので遠ざけるためであると説明されていた。しかし、転出予定とされていた部隊は、その後国王直属の部隊へ改組されつつあるとの報道もある。たとえば、週刊マティションの2019年1月18-24日号は次のように報じていた。「第1歩兵連隊や第11歩兵連隊といった第1師団所属の近衛実戦部隊は、親衛隊へ移管される渦中にあ

⁷ “Kongthap mi kanplianplaeng khrang yai thammai mai mi khao nai TV loei ngiapkrip a.sinchai tham”, Thai E-News, Sept 23, 2019 (<https://thaienews.blogspot.com/2019/09/tv.html>).

⁸ タイ語の原語では nuai chaphokit thahan mahatlek raksa phraong 904、直訳すれば、904 国王警護近習兵特務部隊となる。

⁹ 従来の「国王警護近習兵(thahan mahatlek raksa phraong)」は、「国王と親密 ratchawanlop」という形容句を追加して「国王警護親衛兵 (thahan mahatlek ratchawanlop raksa phraong)」と改称された。名称のほか、実態にどのような変化が生じたのかは不明である。

る。」「改編の結果、第1管区の基幹部隊であり、クーデタの実行部隊でもあった第1師団は、ロップブリー駐屯の第31歩兵連隊のほかには、第1砲兵連隊、第4騎兵大隊、遠距離巡回中隊を基本部隊として残すのみとなった。」「[それへの対応として、首都バンコク東隣の]チャチューンサオ駐屯の第11歩兵師団が後方支援師団から軽歩兵師団に改組され、第1師団を補強するため第1管区へ移管された。」

「第1管区には、改編中の第1師団、904部隊に帰属することになった第2歩兵師団のほかには、カーンチャナブリーの第9歩兵師団とチャチューンサオの第11歩兵師団を残すだけとなっている。このため、2019年4月1日から、従来陸軍司令部直轄であった第2騎兵師団を第1管区直轄に変更することになった。」「第2騎兵師団はバンコクとサラブリーに部隊が駐屯しており、戦車や装甲車両を擁している。この第2騎兵師団も、904部隊の一部になっている。¹⁰⁾

マティションが報じるように、第1師団の第1歩兵連隊と第11歩兵連隊は公式名称が近衛兵から親衛兵へと改称された。アピラット陸軍総司令官は、904部隊司令官を兼任しており、親衛隊付き特別将校でもある。陸軍、親衛隊、904部隊の関係は、はっきりとしないものの、軍隊の中で国王警護部隊の比重が高まっていることは間違いない。

4.2 904部隊

904部隊の904は9世王の家族で4番目を意味する。1番目は9世王、2番目は王妃シリキット、3番目は長女ウボンラット、4番目は長男ワチラーロンコーンである。5番目は次女、6番目は三女ということになる。904は10世王を指している。

904部隊は実像を的確につかむことが難しい。現状では、904部隊の主たる機能は、国王が信頼をおける将校の育成のように思われる。ここでは、タイ・ポスト紙が2019年9月4日に報じた記事に依拠して紹介しておきたい。

904部隊で研修を受ける軍人については、904部隊が全国の30個ほどの大隊から選抜する。その対象には、すでに904部隊に組み込まれている第1師団の第1歩兵連隊と第11歩兵連隊を含めない。30個ほどの大隊は、大隊あたり20名の兵士を選抜する。そこには陸軍士官学校を卒業した将校と下士官から将校に昇進したものが含まれる。研修場所は、バンコク西部のタウィーワッタナー地区の国王宮殿に近い国王近習兵学校である。そこで、2ヶ月の基礎研修と1ヶ月の実務研修が実施される。それら将校に加えて、大隊あたり50名ずつの下士官と兵卒も選抜されて研修を受ける。この研修は2017年8月6日に始まっており、1期生は150名であった。修了生は、職場に復帰した後には、軍隊の名誉を傷つけないように、規律、服装、髪型、態度に配慮しなければ

¹⁰ “Raingan phiset / thot rahat wat phalang scan ha sanyan ‘big daeng’ baek ‘big tu’ khiangkhu su kanmuang cat kamlang rop thap phak 1 mai cap ta ‘big bi – pho.bo. op’”, *Matichon Sutsapda*, Jan 18-24, 2019 (https://www.matichonweekly.com/column/article_163571)

ならない¹¹。

この研修は、「国王警護、宮中での作法、国王の指針にそった兵士のあり方に関する知識の訓練を受けることで、心身を強化するカリキュラムである。」3ヶ月にわたる研修では、兵士は「鼓舞するための文章をたくさん毎日そらんじなければならない。とりわけ国王との接し方に関する6世王時代の文章が重視される。」研修を終えると、完璧な規律が身についている¹²。規律を厳しく教え込まれた修了生は、首回りと袖回りだけが赤色の白い丸首半袖シャツの着用を許される。その上に軍服を着用すると、首回りの赤色が目立つので、「赤首」と呼ばれている。

4.3 赤首の抜擢

2019年10月の定期異動では、赤首の将校が注目を浴び、重要なポストに任命された。904部隊司令官を兼任するアピラット陸軍総司令官は、定年まで1年を残しており続投である。904部隊副司令官のナロンパンは第1管区司令官から陸軍総司令官補佐に昇進して5虎の仲間入りをし、アピラット退役後の総司令官就任の可能性が高まった。もう1人の904部隊副司令官チャルムポンは陸軍特別有識者から国軍参謀長となり、20年に国軍最高司令官に就任する可能性が高まった。いずれも定年退職は23年であり、904部隊幹部が23年まで陸軍と国軍最高司令部を掌握することになる可能性が高まった。

ナロンパンは第31歩兵連隊長、第1師団長、第1管区司令官を経験した神組のエリートである。チャルムポンは15年10月に第2騎兵師団長、17年10月に陸軍作戦部長、18年10月に陸軍副参謀長、19年4月に陸軍特別有識者という経歴である。士官学校や幹部学校の学業成績優秀者が就任することの多い作戦部長に、実戦部隊指揮官の第2騎兵師団長から抜擢されたというのはきわめて異例である。また、陸軍特別有識者という閑職への転任は、結果から判断すれば次の昇進に備えて階級を大将に上げておくための措置であったことになる。

赤首の将校は彼ら以外にも存在する。タムマヌーン第1軍団長は第1管区司令官に、チャルーンチャイ第1管区副司令官は第1軍団長に、ピヤボン第2歩兵師団長は陸士副司令官になった。

さらにもう1人の904部隊副司令官の第1師団長ソンウィットは第1管区副司令官に昇任した。ソンウィットは、アピラットの後を受けて2011年に第11歩兵連隊長と

¹¹ “Senthang daocaratsaeng ‘cho.ko. khodaeng’ ma ru cak ‘khun phon ratsa phraong’ sut pe”, *Thai Post*, Sept 4, 2019 (<https://www.thaipost.net/main/detail/44994>).

¹² “Wikhro ralai ‘wong thewan – thahan sua – buraphaphak’ kognthap yuk ‘big daeng’ ‘khoa daeng’ saphrang”, *Matichon Sutsapda*, Sep 13-19, 2019 (https://www.matichonweekly.com/in-depth/article_228352).

なり、17年に第11歩兵師団長、18年4月にナロンパンの後任の第1師団長となっていた。ソンウィット（陸士35期生相当）は、アピラット（陸士31期生）やナロンパン（陸士33期生）と同じ第1師団の生え抜きであり、定年の24年までまだ時間があるので、今後第1管区司令官を経て、5虎の仲間入りをする可能性が高いと予想されている。

904部隊参謀長でもあるソンボン（元第31歩兵連隊長）は第1師団の副師団長から師団長に昇任した。彼以外にも大佐から少将になり、要職に任命された赤首には、第11州軍司令官から第2歩兵師団長になったタラーボン（元第12歩兵連隊長）、その後任の第11州軍司令官になったタワッチャイ（ソンボンの後任の第31歩兵連隊長）、第2騎兵師団長になったカンタポットなどがある¹³。これらの第1管区の新任の師団長たちは将来の第1管区と陸軍を背負って立つことになる。

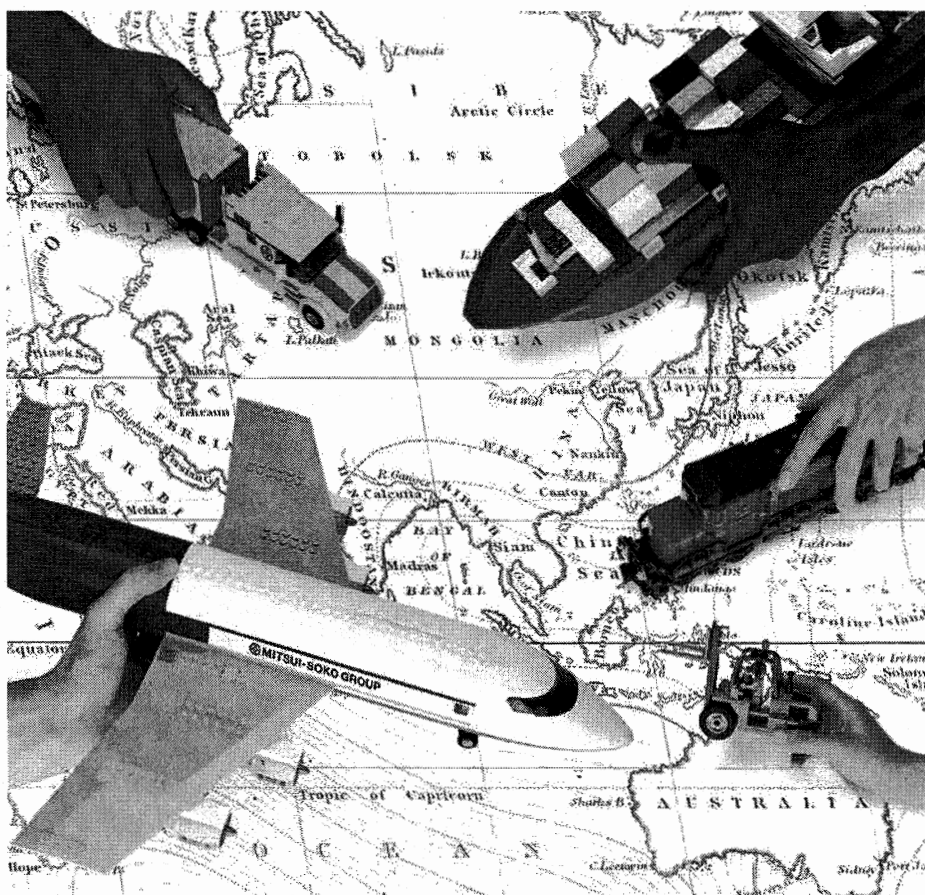
おわりに

2014年クーデタ以後、プラユット首相（陸士23期生）、アヌボン内務大臣（21期生）、プラウィット副首相（17期生）の3名を頭目とする東部の虎が国政を支配している。彼らの国政支配は、陸軍への支配に立脚していた。彼らの陸軍支配は、アヌボンが06年クーデタで中心的な役割を果たし、陸軍総司令官に就任して人事権を掌握したことに負っていた。東部の虎は07年からアヌボン、プラユット、ウドムデート、ティエラチャイと4名続けて陸軍総司令官を出した。しかしながら、陸軍総司令官は、16年には特殊戦争部隊出身のチャルムチャイ、18年には第1師団出身のアピラットとなった。次の総司令官も第1師団出身者が最有力視されている。

東部の虎が陸軍を支配する時代は終わった。これは第1師団が第2歩兵師団との権力闘争に勝利をおさめたことを意味するわけではない。東部の虎が2度のクーデタで政治権力を握ったのは、君主制がタックシンによって脅かされることを阻止するためであった。東部の虎の政治介入の主目的は、9世王の息子を10世王として即位させ、タックシンの影響力を排除して新体制を発足させることであった。9世王が生涯をかけて構築した「国王を元首とする民主主義統治体制」、すなわち君主の政治関与を容認する君民共治の原則に基づく統治体制をおおむね継承することに成功すれば、東部の虎の使命は終了である。つまり、東部の虎が政治や軍隊を支配する必要はなくなった。東部の虎に代わって台頭したのは、赤首つまり君主への忠誠心が格別に強い将校である。これは陸軍が君主制からの自立性を低下させていることを意味する。権力を死守

¹³ “Cho.ko. kho daeng phangat! Protklao pho naiphon 871 tamnaeng”, *Thai Post*, Sep 8, 2019 (<https://www.thaipost.net/main/detail/45237>); “Senthang dao carat saeng ‘cho.ko. khodaeng’ ma rucak ‘khunphon raksa phraong’ sut pe”, *Thai Post*, Sep 4, 2019 (<https://www.thaipost.net/main/detail/44994>).

する憲法を作って政権にしがみつく東部の虎 OB を支えているのは、現役の東部の虎よりもむしろ君主の軍隊である。それは東部の虎ほどには盤石ではない。政府、軍隊、君主制の関係は大きく変わりつつあるといえよう。



物流から価値を。

モノを動かす。心で動かす。

MITSUI-SOKO GROUP

物流から価値を。三井倉庫グループのビジョンであるこの言葉にはさまざまな意味が込められています。経済合理性があること、素早い対応ができること、正確であること、そしていうまでもなく安全であること…。物流に求められる「価値」はますます多様化しています。三井倉庫グループは、グローバルな視点で日々新たな挑戦を続け、物流から価値を生み出しています。